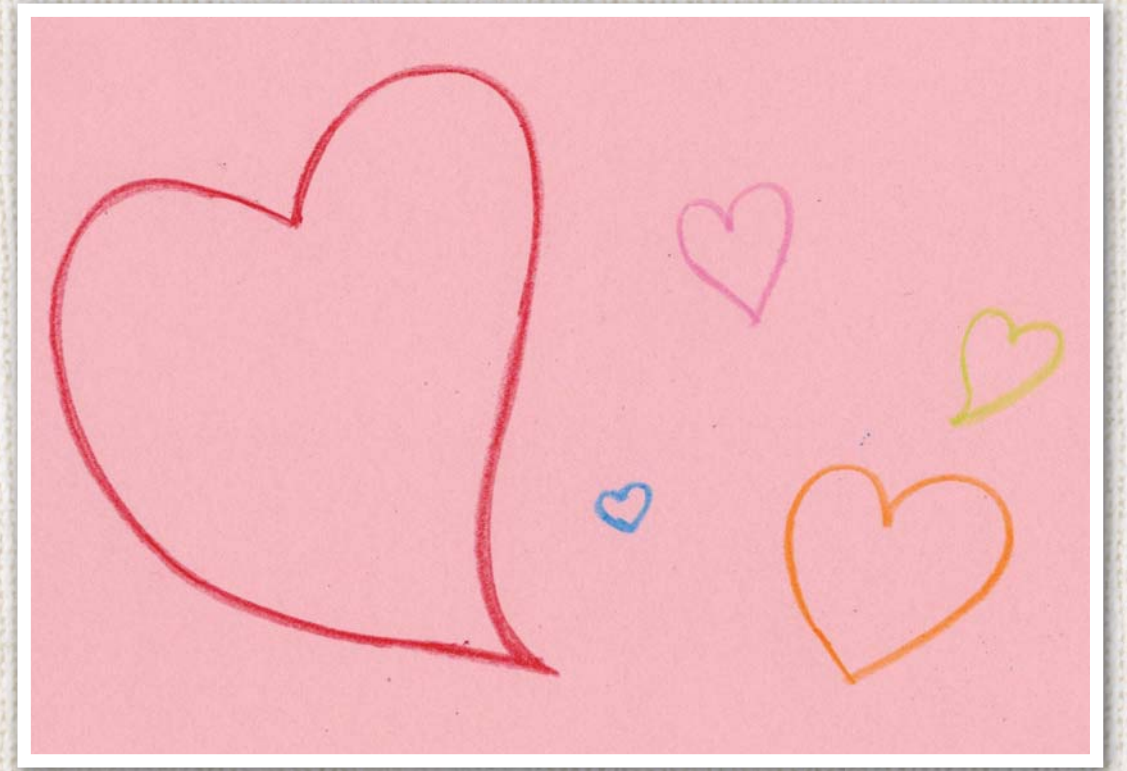
やっちゃん
何に乗ってくの？

「やっちゃん、学校に行くとき何に乗ってくの？」
「バスで行く！」
やっちゃんは小学５年生になって、
路線バスに乗って養護学校への
通学を始めました。
ミニカーやリモコンカー、
列車や飛行機など、
やっちゃんは
小さいころから乗り物が大好き。
毎日バスに乗れるなんて夢のようです。

お母さんと二人でバスに乗って、
学校の近くのバス停で降りる練習を
何度も何度もくりかえしました。

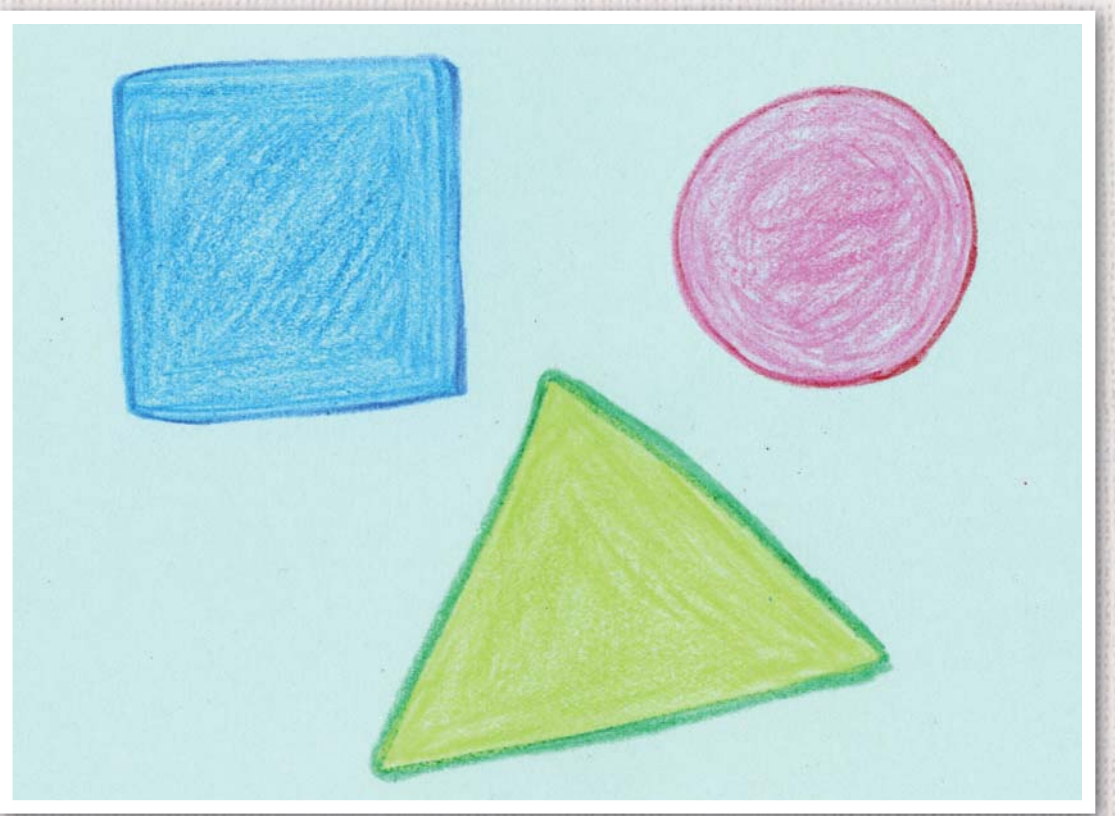
いよいよ一人で通学する日がやってきました。
やっちゃんはドキドキしていました。
ドキドキしてたのはお母さんもいっしょ。
お母さんはこっそり
バスの後ろを車で追いかけ、
やっちゃんがバス停で降りるか見守りました。

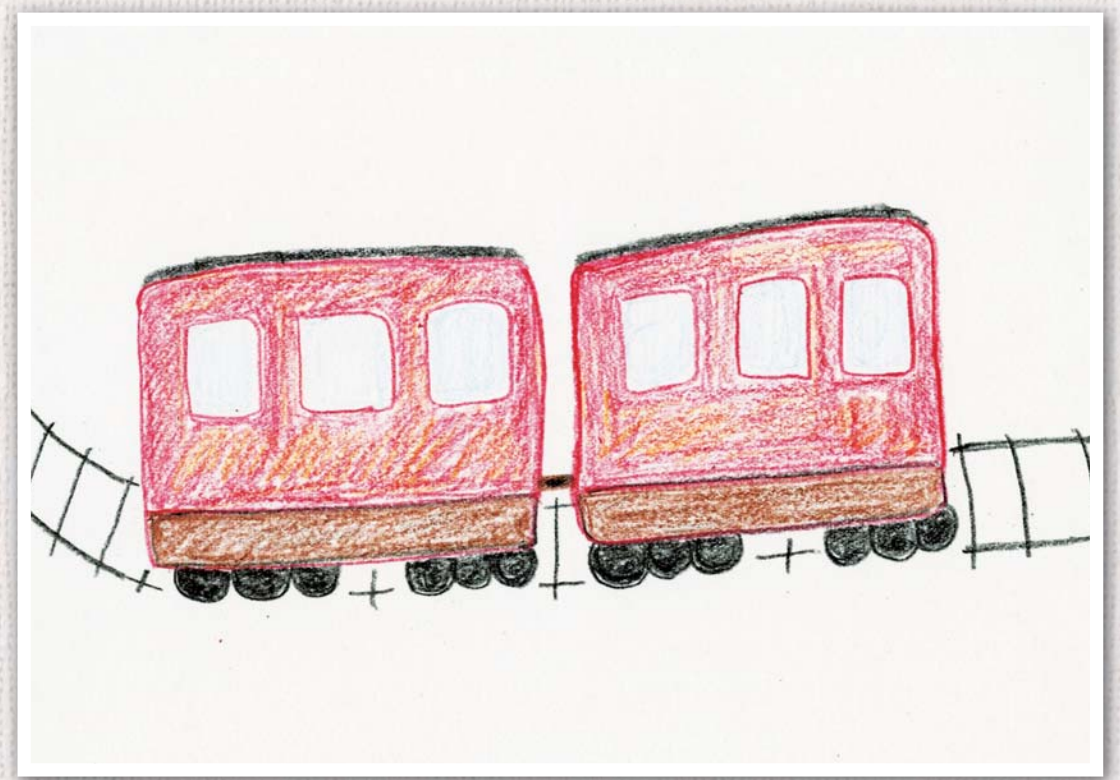
「ちゃんと降りた」
その姿を確認してホッとしました。



ある日のこと、
やっちゃんはいつものバス停で
降りませんでした。
「あれ？あれ？」
お母さんが終点まで追いかけていくと、
やっちゃんはバスに乗ったまま。
「失敗もあるよね」
そんなこともありました。
バスで一緒になる優しいおじいちゃん先生。
困っていたやっちゃんを助けてくれた
女学生さん。
うれしい、すてきな出逢いもありました。

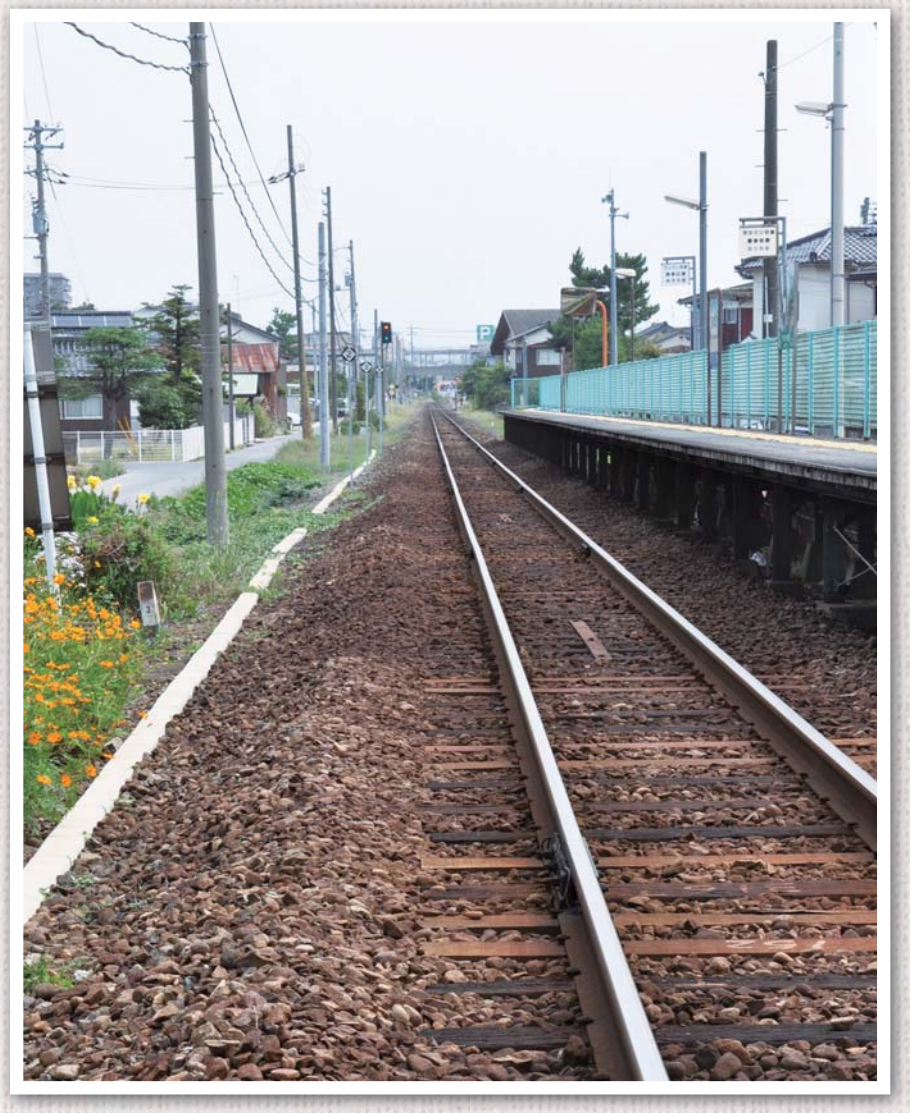
やっちゃんは赤ちゃんのとき
「結節性硬化症」という
６千人から１万人に一人といわれる
難しい病気だということがわかりました。
今もたくさんのお医者さんが
研究を続けています。
病気のせいで、
やっちゃんは文字を読んだり、
書いたりすることができません。
発作の心配もあります。
お母さんは心配だけど、
いろいろな体験をしてほしくて、
やっちゃんの自立通学を応援しました。





高等部になって、やっちゃんは
列車通学を始めました。
朝の通勤や通学の人で列車は
ぎゅうぎゅう詰め。
「何か変な子」
「変なやつが乗ってくる」
高校生の声が
一緒にいたお母さんに聞こえてきました。
近くの大人たちもやっちゃんを
ジロジロ見たり、
ひそひそと話しています。

お母さんは
とても悲しい気持ちになりました。
「悲しい思いをする人がなくなりますように…。
優しい人たちが増えますように…」。
お母さんは願いました。

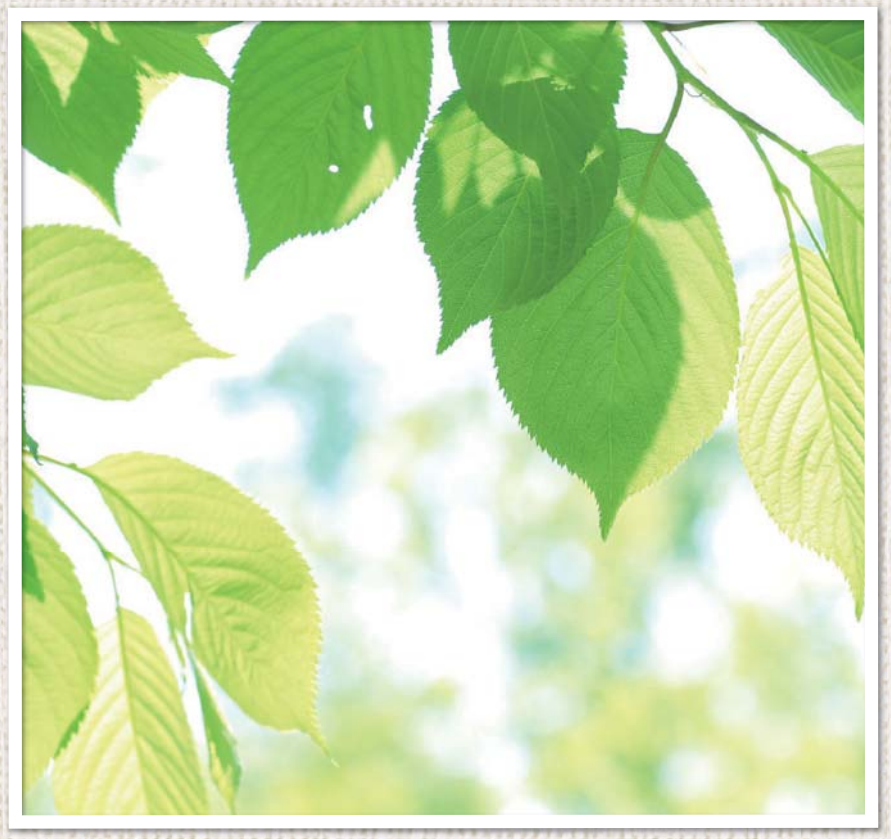


あれから年数がたち、お母さんは
障がいに対する周囲の変化を
感じるようになりました。

ゆっくりゆっくり
すこしずつだけど

あのときのお母さんの願いは
小さな花をつけはじめています。

「いつか世の中が優しさの花で
いっぱいになりますように…」



「知的障がい」について

発達期になんらかの原因で知的な能力が年齢相応に発達していない状態、および社会生活への適応に困難があります。「言葉を使う」「記憶する」「人とのやりとり」に少し時間を要します。周囲の理解や支援で一歩一歩成長できる可能性を持っています。

★こんな配慮がうれしい！

◇ゆっくり簡単な言葉で話しかける
◇危険なシーンを目の当たりにしたらやさしく声をかける
◇パニック行動が起きたときは、落ち着ける場所へ誘導
◇誤解されやすい行動をする場合があるので、
　思い込みで判断せず見守る

あとがき

「絵本になるような話はないですよ。本当にいいですか?」。取材の日、やっちゃんのお母さんは心配そうに話された。家族のこと、障がいのこと、成長の過程や暮らしなど家族の心にそっとしまっておきたいことにも触れる作業。自立通学中の列車内での大人の態度や心無い言葉が一番辛かったと本音がこぼれる。障がいのある人が暮らしやすくなるようにと続けてきた活動は少しずつ実を結び、社会の意識や制度も以前より充実してきたと喜ぶ。私の想像の及ばない苦労も全て昇華させ、思い出として語る姿がまぶしかった。(天)